

共に生きる

福井市成和中学校 3年 仲村 卓也

「身体障害者」この言葉に苦しめられている人は、いったい何人いるだろうか。そして彼らのつらさを分かっている人は、いったい何人いるだろうか。

僕の父は身体障害者だ。元気にバリバリ働いていた父が、37歳の若さで突然倒れた。「脳出血」だった。右半身の麻痺と言語障害が残った。5年生だった僕には、救急のベッドに横たわっている父の姿を受け止めることができなかった。何も言えず、ただ涙がこぼれた。祖父や祖母が「命があっただけ良かった」と話していたのを覚えている。本当にそうだ。父がいなくなるなんて考えられない。

一番つらい思いをしていたのは、父本人だったと思う。今まで当たり前に行っていたことが突然できなくなってしまうということは大変つらいことだ。自由に動くことも、しゃべることもできなくなってしまった父だが、毎日一生懸命、一人で歩くためのリハビリを繰り返し、発音の練習もしていた。「障害」という重い荷物を背負いながらも、一生懸命生きようとしている父は本当に強い人だなと心から思った。今では、足に装具をつけてはいるが一人で歩けるようになり、日常会話に困ることがないまでに回復した。

後になって母から聞いた話だが、二人で何度も何度も泣いたそうだ。父は「自分がこんな身体になって、子供たちがかわいそうだ」と言って泣いたという。いつも冗談を言っただけからかってくる父がそんな風に考えていてくれたと知り胸が熱くなった。

出かけたときに、たまに車いすに乗っている人や杖をついて歩いている人を見かけることがある。そのたびに僕は、かわいそうにと思っていた。今思えば彼らは本当にかわいそうだったのか、と疑問に思う。父は、右半身に麻痺は残ってしまったが生きていたことをうれしく思い、前向きにリハビリに取り組んでいた。彼らもきっとそうだ。別に自分がかわいそうだ、なんて思っていない。自分の身体に障害があっても、彼らも父のように一生懸命、前向きに生きているのだと思う。それをかわいそうだと思うのは、僕の先入観が生み出した偏見だ。また、人を見てかわいそうだと思う時点で僕は人を上から見ていると思う。障害を持っていない人は、障害を持っている人より偉いのか。決してそんなことはない。父が病気になって初めてそう気づいた。しかし、身体障害者を見て心の奥でかわいそうだと思う自分がいたと思うと、相手に申し訳ない気持ちになり、自分が嫌になる。

「差別」良くないということは誰にでも分かるが、いったいどういう意味だろうか。辞書で調べると「先入観や偏見から不平等に扱うこと」とある。しかし本当にそれだけなのだろうか。

父がだいぶよくなり家に帰ってくると、僕はなぜか気を遣うようになっていた。お父さんは身体障害者だけど普通の人と同じように接しないと…。こればかり考えていた気がする。しかし、この考え自体が差別になるのではないかと最近思うようになってきた。自分では気づかないかもしれないが、その意識が相手を傷つけてしまうことがあると思う。

一番苦しんでいるのはやはり、本人なのだ。突然、もしくは生まれつき背負いたくもないものを背負い、一生そのハンデと共に生きていかなければならない。その苦しみは本人か、もしくは同じ身体障害者にしか分からない。さっきのように身体障害者を見て、かわいそうだと思ったりするのも差別だと僕は思う。難しいかもしれないが、相手が身体障害者だから、家族だからというのは関係なく、同じ一人の人間としてお互いに支え合って生きていかなければならないのだ。

僕は今回、人権作文を書くにあたって父のことを書こうかどうかとても悩んだ。確かに、父にしてみればあまりいい気はしないだろう。だけど、いろんな苦難を乗り越え、警察という仕事に戻り、一生懸命頑張っている父の姿を見て、障害のつらさを伝え、少しでも差別が減ってほしいという願いから書いた。

父は「障害」という重い荷物を背負いながらも一生懸命、前向きに生きている。それは自分のためではなく、家族のためだったりする。人間は決して一人の力では生きていけない。必ずどこかで誰かに支えられ、そして自分も必ずどこかで誰かを支えている。それは身体障害者であろうがなかろうが同じである。身体障害者を支えているつもりが、実は知らぬ間に自分が支えられているかもしれない。人間はお互いに支え合って生きているもので、一人の人間としての大きさは決して変わらないのである。